一體人種學に於ては個々人の徴表は或は變化することもあらうが全體としてのその平均値は長時間にあつても不變なりとするが一般に認められるところ。ワイデンライヒ氏の定義に從ふも「人種とは共有物に依つて相關的に結合され、變化の一定の限界に於て一定の種徴表と一致し、この特殊な徴表は本質的な限界超出なしに生活條件、外界條件に依つて變化される人種群なり」としてゐる。かくの如く徴表の總變化の統計的均衡の安定性は無條件に信ぜらるゝところなるに、本研究に於てはこれと全く反對の結果を得た。近年人種學のこの臆說に對する不滿が高まつて來たとは云へ、尙それに對する確固たる方法なく從つて充分なる力を持たなかつた。勿論この研究も方法論に於て危險性を有しないでもなく、確たる結論に到達した譯でもない。しかし著者の學問に對する不撓の努力と熱心とは從來の臆說に對し反省の機と示唆を與へたものであると云へる。實際吾人は如何なる學問に於ても著者も云ふごとく我々が自然の中に見てゐる現實性に對して試みをすることに依つて從來からの信頼を再檢討する必要があるのではなからうか。

終りに本書の原名と目次を掲げて紹介の責をふさぐことゝする。

H. L. Shapiro, with the field assistance of Frederick S. Hulse. Migration and Enviroment: A Study of the Physical Characteristics of the Japanese Immigrant to Hawaii and the Effects of Enviroument on Thier Descendants.

目　次

第一章　緒　論
第二章　方法論及び統計の考察
第三章　日本人移民に於ける體質的淘汰の證左
第四章　ハワイ生れの體質的變化
第五章　全移民の出自縣別
第六章　年齢による變化
第七章　職業による變化
第八章　體質上の特徴
第九章　結　論

（オックスフォード大學版、五九四頁、定價七・五ドル）〔柴田孝夫〕

考古學研究

濱田耕作著

故濱田博士の東亜考古學に關する諸論文は昭和五年に一度纒められて『東亜考古學研究』と題し公刊せられたが、それ以後昨年七月博士が他界せられる迄の東亜考古學の諸論攷と、別に歐米考古學に關するものを加へて一册の成書となつたのが本書である。之はもと博士自身が書肆の懇請に依つて美術史關係の論文と併せて昭和十二年に計畫されたものであつたが、未だ實現されるに到らずして總長に就任、ついで他界された爲に、博士の依囑に從うて門下梅原博士が其の意企を繼承、故博士の考古學に關する最後の成書として新たに博士十八歳の處女作や記念すべきその絶筆「古

代遺物」等をも附載したものである。これは其の挿圖、圖版等隨處に新しきものが添加されたことゝ共に、編者の故著者に對する最後のはなむけとも見られ得るものである。

さて今は最後の成書となつた濱田博士のこの書をひもとく人はみな、最初の羽田亨博士の序文に於いて、著者の學徒としての生涯に限りなき憧憬をいだくであらう。本書に收められた各方面に亙る論攻を通じて、實際吾人は博士の學の廣さをしみ〴〵感ずるものがある。以下その内容を擧げて概觀紹介しよう。

卷頭に收められた「日本の民族・言語・國民性及文化的性格の歴史的發展」は日本文化全體を概觀した長篇でこれに次ぐものに「日本文化の源泉」「日本原始文化」がある。是等は考古學或は歴史の各時代の文化は夫々切り離した個別概念として考ふべきものでなく、石器時代の我が固有文化基盤の上に大陸周邊の文化の交流が時間的に往來した事を平明に說かれたもので、博士の「考古學者は文化史家の態度を以て其の得來つた材料を縱横に使用すべきである」との主張を具象されたものである。殊に最初の一編の如き博士の日本歴史觀が獨特の廣い教養と信念の上に成立してゐるのが認められる。次に日本考古學に關する論考として、「前方後圓墳の諸問題」「埴輪に關する二三の考察」「遺物遺跡から見た上代の近畿地方」「考古學上より見たる大和」「考古學上及美術史上より觀たる大阪地方」「日本最大の巨石墳墓の研究」「大和島ノ庄石舞臺古墳第二回の調査に就て」等がある。石舞臺の發掘に關する概括的な報告と夫々の地方の鄕土誌的な記述を除く他の二篇中、前方後圓墳の外形に興味をもつた著者が帝陵の制に依つてその形式觀を考へ更に右の形の發展の上に盾の及ぼした影響を見んとしたものとして、又埴輪ではその出現に對して先行の甕棺との連系を考へられた直觀の鋭利さが注意される。たゞ博士の直觀並びに文化史的立場が更にかゝる古墳並びに埴輪を出現せしめた歴史的背景にまで深く及んでゐないのは稍〻淋しく思ふ。朝鮮考古學では「朝鮮に於ける考古學的調査研究と日本考古學」「樂浪古墳最近の發掘」「樂浪の彩繪漆篋」「新羅の寶冠」「新羅の畫像甎」等がある。是等は孰れも内地以上の親しみを持たれた朝鮮の古物に對し、その美はしき目立つたものゝ姿を如何に美的に會得せられたかを物語るものである。今日樂浪文化が支那漢代文物研究の據所として、先づ第一に誰もが手を着けるのを思ふ時これに關する諸編は大きな意味を持つものであり、また「新羅の寶冠」等に見る高貴な美術品の考證の如きは博士を他にして之を期し難いであらう。「赤峯附近發見の完形彩文土器」は同地出土の完全な彩文土器に接した著者の喜びを語る紹介文であるが、以下「支那古銅器の話」「觚と杯とに就いて」「蟻鼻錢に就いて」「漢千秋萬歲鏡」「支那六朝の佛像と土偶」「六朝の石枕」「禽獸葡萄紋に就いて」等、いづれも現在支那考古學では主要な研究對象としてゐるものに就いてのそれ〴〵の考察で、之等と既刊の『東亞考古學研究』所收の諸論攷とを併せるならば、今日の支那考古學の主要部門は全部網羅されたことを感ずるのである。紹介者は博士の見界の廣く、あらゆる分野に於いて其の廣い教養から研究の門戸を開設された事にたゞ欽仰す

るものである。最後に「埃及に於ける希臘殖民地」「希臘クリート島の發掘」「エトルスキの遺跡と其の文化」「伊太利の古市ポムペイ及ヘルクラネウムの發掘」「南米美術序說」の優れた長編がある。是等は西洋古典文化の教養を積まれた博士の若き日の述作である。考古學を志す者にとつて、第一教養たる人類文化の發生と西洋古典文化の成立の概念がなほ多く缺け勝な我が學界に對して、早くこのエーゲ海文明やローマ以前のエトルスキーの文明を紹介された事は博士の大きな業績の一つである。なほ附錄に收められた日本石器時代住民論は幼き日の博士の學鋭論難の情熱のこもつたものがあり、博士の處女作「考古材料」に見る南河內國府附近の遺跡は後に京大考古學教室にて學術的發掘が施され我が史前の研究に一時期を劃したるを思ひ併せる時、この著者の論文を通じて感慨深いものがあり、最後の「古代の遺物」の一篇とは博士四十年の學的生涯の兩端をなすものである。

以上本書の內容を瞥見した。羽田博士の序にもその意味の見る如く著者は黎明期の我が考古學界にあつて、今日の我が考古學が發展すべき進路をその短い生涯の中に自ら進んで具現されたのである。而かも獨り自分の好きこのむ小さな領域に局限することもなく、よく人類が生起した活動の全舞臺に及ぼされたのである。まことに博士こそは黎明期の我が學界が生んだ巨星である。いまその業績が斯くの如く、悲しくも博士の遺稿となつて集大成された事は後來の研究者に多くの示唆と新らしい出發點とを與へるものとして、我が學界の等しく之を迎へ受ける處であらう。（菊版、本文六七五頁、圖版六三葉、昭和十四年九月、座右寶刊行會發行定價八五〇）（藤岡謙二郎）

東京城 ―渤海國上京龍泉府址の發掘調査―

東方考古學叢刊　第五册

東亞考古學會

本書は、東亞考古學會が、昭和八、九兩年に亙つて行つた渤海國の首都上京龍泉府遺址の發掘調査の報告書である。

東京城といふのは、滿洲國牡丹江省寧安縣下の一小都邑で、すなはち遺址はこの地に存在するのである。渤海國はわが文武天皇の御代に大祚榮によつて建てられ、今の東部滿洲から、露領沿海州、朝鮮の咸鏡北道をふくめた地方を版圖とし、支那においては唐及び五代の後梁、後唐と時を同じうし、わが國においては、奈良、平安兩朝に亙り、契丹に滅されるまで、十五代二百七十餘年の命脈を保つた。渤海國を組織したのは、高勾麗の遺民と靺鞨人であり、渤海國以後に於て滿洲に國を建てた遼や金や近くは淸朝などとはちがつて漢人參劃といふことは認められないにもかゝはらず、文獻に傳へられる渤海國は高度の漢文化を攝取してゐて、その意味で、唐史はこれを海東の盛國と稱してゐるのである。またわが國とは、聖武天皇の神龜四年以來三十五回に上る修交の事實があることは周く人の知る所である。

ところが、淋しいことには、渤海國は自らの記錄を殘してをらないので、支那及びわが國に傳へられてゐる記錄によつて、その